

CHUOH TRY+ANGLE

知っ得通信

2014年1月20日発行 編集・発行：中央教育研究所(株) 〒732-0811 広島市南区段原2-15-5 <http://www.chuoh-kyouiku.co.jp/>



中土井鉄信の「地域一番の繁盛塾になるための最強法則」 vol.23

＜塾のスタンダードを知る！＞

皆さん、お正月はどのようにお過ごしになりましたか。1年の計は元旦にありと言いますが、2014年の目標は具体的に立てましたか。私は、例年、個人的な誓いとマネジメント・ブレイン・アソシエイツの誓いを二つ立てます。毎年の達成率は、30%前後です。全然、威張れた結果ではありませんが、少しでも目標に近づこうと毎年頑張ってきました。今年も前へ前へと進んでいきたいと思ひます。どうぞ、今年もよろしくお祈ひします。

さて、今年最初のテーマですが、塾のスタンダードについて書きたいと思ひます。時代が変われば、塾のスタンダードも変化します。私が塾業に身を置いた30年前からたどっていききたいと思ひます。

私は、1984年3月に大学を卒業し、教職浪人として塾でアルバイトをしました。時給の安い、みすばらしい補習塾で1年を過ごし、翌年1月の末には、その塾の法人化に伴ってか、なぜか社員になり、そこから私の塾人生が本格的にスタートします。

もうかれこれ30年間も塾業界に身を置いています。この30年間で、塾業界のスタンダードは、どう変化してきたのか、この辺をお伝えしたいと思ひます。

学習塾が初めて株の店頭公開を果たしたのは1985年です。学究社が、「国立学院（現：ena）」という屋号で学習塾の第1号店頭公開企業になりました。国立学院は、その当時、今は亡き山田義塾とガチンコ勝負をしていましたが、そういう競争関係の中で社業を伸ばし、拡大をしていきました。

その当時の塾のスタンダードは、なんといっても熱血指導です。その当時の国立学院では、確か、熱誠指導と言っていたと思ひます。この頃の大抵の進学塾では、生徒が鉢巻をし、先生が竹刀をもって、熱い指導をしていま

した。補習塾ではなく、進学塾がメインの時代です。

1980年代の塾のスタンダードは（個別指導はほとんど認知されていませんでした）、中学3年生で、週4回は通塾していました。1日1教科で、100分から120分の指導が、普通でした。英数国で各1日、理社の抱き合わせで1日です。学校以上に厳しい指導が前提でした。塾の指示通りにしなければならぬという暗黙の前提が、通塾する生徒にも保護者にもありました。今からすれば、非常に楽な運営を学習塾は行っていたということです。

補習塾のスタンダードと言えば、私の勤めた塾を例にすると、週3回で4教科を指導していました。1日あたり中学生は2回転させていました。18:00～19:30 / 19:40～21:10です。1教科90分で、英数は、1日1教科、理社は、各45分で指導をしていました。国語は、ありませんでした。1980年代は、まだ個別指導は、大きな勢力にはなっていませんでした。

日本がバブル景気に沸いた1980年代後半から1990年代に入ると、徐々に塾のスタンダードが、変化していきます。個別指導の塾が徐々に始り、ある程度の勢いを持つようになります。個への対応が求められるようになってくるのです。

私は、1992年に横浜にある中萬学院の経営幹部になり、翌年に校舎コンセプトに関する提案を「集団指導における個への対応とアメニティーの充実した校舎」という表題で行いました。今までとは違う集団指導のあり方が必要になってきたと実感していました。特に、『個に対応すること』が塾で生徒を集めるポイントになりそうだと、その当時非常に強く思っていました。（余談ですが、そこからの3年半で、中萬学院は劇的に拡大していきま

した)。

バブル崩壊後も塾業界は右肩上がりでしたが、山一證券、北海道拓殖銀行の倒産等で、97年に初めて塾業界は、右肩下がりを経験しました。学習塾が初めて景気の影響を受けた年だったのです。

それまでの塾業界は、景気に影響されることはありませんでした。どんなに景気が悪かろうと補助教育費が下がったことはなかったのです。

ここから、塾のスタンダードに大きな変化が生まれます。今まで、教育費に糸目をつけなかった顧客も必要なものだけを選んでお金をかけるようになっていきます。

変化のキーワードは、『利便性』です。必要なものだけやればよい。簡単に出来るものだけやればよい。いわゆる「安(安い)近(近い)短(短い)」の風潮が出てきます。

そして、利便性において集団指導に勝る個別指導が急激に業界内の地位を占めるようになります。

2000年代に入ると、「ゆとり教育」に象徴される教育改革が行われます。この改革でさらに、『利便性』に拍車がかかります。勉強が易しくなって、そんなに必死に勉強する必要はないという風潮になってしまったのです。

その結果、集団指導の塾も通塾回数の見直しを迫られます。中学3年生で週3回。中学1・2年生で週2回の通塾が徐々にスタンダードになっていくようになります。個別指導は、まだこの時期、集団指導と形態上の戦いをしているところですが、『利便性』だけの戦いです。集団指導にはない利点。つまり「勉強したい科目だけを受講できる」、「気に入った先生に教えてもらえる」ということだけで差別化されていた時代でした。

そして、景気が回復するかに見えた2008年にリーマンショックが起こり、塾のスタンダードが更に変わります。『利便性』と『投資性』が、塾のスタンダードになるのです。形態だけで集団指導から生徒を奪っていた個別指導にも厳しい目が向けられるようになり、『利便性』だけではなく『投資性』も吟味されるようになります。個別指導は、『効果性』と価格を天秤にかけるようになります。個別指導の料金の高さがネックとなり、集団指導の塾に生徒が流れ出したのです。

個別指導は、「価格が高い割には、効果はどうかしら?」という不安が集団指導に向かわせました。その頃から、低価格の個別指導が急激に始まりました。また、2012年からスタートした新学習指導要領が、勉強に対する不安を増大させ、ここに『効果性』が塾のスタンダードに明確に加わるようになりました。

手ごろな値段で、そんなに無理をしないで、結果も出る塾が、一つの選択肢になったのです。

こうして、現在の塾のスタンダードが生まれました。私たちは、常に塾のスタンダードをしっかり掴んでおくことが重要です。そして、スタンダードをどう超えていくかを考えることが、これからの時代の塾経営には必要不可欠なことなのです。

ぜひ、皆さん、自塾の具体的なアイテムをスタンダードと比べてみてください。地域の塾のスタンダードと比較して、自塾のアイテムは勝っているのかどうか検討を加え、来期にはスタンダードを超えるように準備をしてください。

自己満足に陥らないためにも、塾のスタンダードと比較するようにしてください。

【あとがき】

いよいよ受験本番です。貴塾におかれましても、第一志望校合格を実現するために熱い指導がなされていることでしょう。入試指導は、学習塾の指導の集大成です。塾にとっても生徒にとっても、やりきって結果を待ちましょう!



かれこれ 20 年ぐらい前になるでしょうか。受験業界で「新学力観の問題」という言葉が流行したことがありました。正しくは「新しい学力観に基づく問題」といい、単なる知識や理解度をみるのではなく、思考力や表現力、判断力などをみる問題を指します。コミュニケーションのための応答に関する問題や、直観を働かせたり、規則性を読み取ったりする問題はもちろんのこと、絵・写真・資料の読み取り、自身の意見の表明など、当時は「ユニーク」だと思われた問題が多くありました。

時が経つのは早いもので、いまや「新学力観」という言葉は死語となりつつあります。たとえば、公立中高一貫校入試で出題される問題はすべての「新学力観の問題」であり、代わって「適性検査」という言葉が一般化しました。もちろん、公立高校入試では、いわゆる「新学力観の問題」がほぼすべての教科で毎年のように出題されており、わざわざ「新学力観」といった言葉を用いて定義づける必要がなくなった（または新鮮味がなくなった）ということもできるでしょう。

一方、2013 年 10 月 31 日、政府の教育再生実行会議は大学入試改革に関する提言をまとめ、安倍首相に提出しました（第四次提言）。その中で現在の高校教育と大学入試を「知識偏重」と断罪したうえで、到達度テスト（発展レベル）の導入、1 点刻みの選抜からの脱却、複数回受験できる環境の構築を提言しています。「知識偏重」という言葉を耳にすると、算数の教科書から台形の面積公式を削除したり、円周率に 3 を用いたりした時代の再来か…と脳裏をよぎります。

時代は、知識よりも思考力や表現力、判断力を求める時代になっているのか。そういう気持ちにさえなるかもしれません。しかし、人類がここまで発展できた最大の要因は何でしょうか。無論、それは「知の蓄積とその活用」です。

一例を挙げましょう。

「世界一有名な方程式」と問われれば、皆さんは何を思い浮かべますか。一般的には、アインシュタインが 1905 年に発表した「 $E=mc^2$ 」でしょう。E はエネルギー、m は物体の質量、c は光の速さを指し、質量が大きければ大きいほどその物体の持つエネルギーは大きいという関係式です。この特殊相対性理論は、核兵器の開発をはじめとして、カーナビなどに使われている GPS 機能にも応用されたのは広く知られています。

また、野鳥の生息数の算出には数学が応用されています。いくつかの方法があるそうですが、最も有名なのは、ライン・トランセクト法でしょう。総数＝発見数 ÷ (遭遇率 × 発見率 × 面積率) という公式を用います。

たとえば、遭遇率および発見率が 6 割、面積率が全体の 30 分の 1、発見した野鳥が 10 羽ならば、公式より、総数はおよそ 830 羽だとわかります。なお、このライン・トランセクト法の簡易版は、すでに公立高校入試や公立中高一貫校入試で出題されているため、ご存じの方もいらっしゃるでしょう。

一時期、公立中高一貫校入試といえば、「知識を問うのではなく、児童の考え方を問う」などと言われ、思考力や表現力といった言葉が重宝がられ、「塾漬けしていない子が受かる」とまで言われた時期がありました。しかし、2014 年現在、こういった言葉を信じる人は皆無といてもよいでしょう。

アインシュタインの特殊相対性理論が核兵器や GPS 機能に応用されたように、また、数学的思考に基づくライン・トランセクト法が野鳥の生息数の算出に活かされているように、先人が生み出した知がもととなって、われわれ人類は社会を発展させてきました（もちろん、核兵器のように、使い方次第で生命を脅かす場合もあります）。

現代社会における日本の繁栄に限ってみても、知の支えがあったからこそ現在が成り立っており、知を軽視し、思考力や表現力、判断力といったパフォーマンス能力のみを重視する考え方には賛同できません。敢えて言うならば、知を身につけた先に、思考力や表現力、判断力があると考えるべきだと思うのです。

計算がまともにできないのに、思考力も何もないでしょう。漢字をまともに覚えていないのに表現力も何もないでしょう。物事を正しく選別する知識がないのに、判断力も何もないでしょう。知識の丸暗記では、その先の発展がありませんが、逆に知そのものを否定しては、それは「無」に過ぎません。

幅広い教養を土台として、さらに成長していける子どもたちをどの学校（大学）も求めているはずで、これはまさに普遍でしょう。そうであるならば、知を学んでいく過程を通じて、思考力や表現力、判断力を身につけていくための工夫が、これからの塾が取り組むべき指導のトレンドになると思います。 (つづく)